

『その時が来る』(ダニエル書 11章36節-12章4節) 2022.3.13.

<はじめに> 「歴史は繰り返す」と言われます。それ故に歴史から、私たちは多くの教訓・警戒を得ることができます。しかし、悲しいかな人間は同じ轍にはまることが何と多いことでしょうか。そんな人間を神はどのようにご覧になっているでしょう(創世記 6:5-8、詩篇 2:1-6)。

I ギリシア帝国の中で(11:2-20)

①ダニエル書の預言と幻

2・7章で帝国の変遷の流れが明らかにされます。8章で示されたペルシア・ギリシア両帝国の興亡は、10-11章でより詳細に描かれ、それは「終わりの日」へと向かいます(12章)。ダニエルはその渦中にいるイスラエル民族の回復を祈り、幻を与えられました(9章)。

②北の国と南の国(11:2-20)

ペルシア帝国は、「一人の勇敢な王」ギリシア・アレキサンダーの出現で滅亡します(2-3)。彼の死後、国は4分割され、その二つの国、「北の国」セレウコス王朝と「南の国」プトレマイオス王朝が政争を繰り返しますが、両国とも圧倒的な覇権を得るには至りません。

③あなたの民(14)と麗しい国(16)

捕囚から帰還したイスラエル民族は、列強の狭間で勢力争いの餌食とされます。当初は南の国エジプトの支配下で、民の反乱も失敗します(14)。やがて、北の国シリア・アンティオコス3世の侵攻に呑み込まれます(15-20)。

II 反逆の歴史(11:21-45、12:1-4)

①一人の卑劣な者(21-35)

アンティオコス4世(エピファネス:神の顕現)は狡猾・残虐で勢力を伸ばし、2度のエジプト侵攻を企てますが失敗し、その怒りを彼は、エルサレムと神殿・ユダヤ人に向けます。神殿にゼウス像を立て、祭壇にユダヤ律法で忌避な豚をささげ、逆らう者を倒します(9:27)。

②神よりも自分を高く上げる王(36-39)

エピファネスに倣う王は、その後も姿を変えて次々現れます。「この王」(36)はその総体であり、その本質は神をも崇めず大言壮語し、「皆の神」「金、銀、宝石、宝物」(38)「異国の神」(39)を信奉して、自分の意のままに侵略し、なびく者に国土を分け与えます。

③終わりのとき(40-45、12:1-4)

「終わりの時」(40)に、神に逆らう者の象徴である北の国が南の国に破壊的襲撃と略奪を行い、麗しい国を占領しますが、東と北の出来事に怯え、激しく怒り退却します。最終的に彼は海(地中海)と聖なる麗しい山(エルサレム)の間に進み、そこで遂に滅ぼされます。

III 歴史と預言が示すこと

①しかし、成功しない(17、27)

「しかし」11回、「…が」12回繰り返されてます。諸王が力を増し、周囲に幾度も攻めますが、いずれも勝利に至りません(12)。怒り・恨み・高ぶりから撃って出て、ある程度制圧しても、それさえしばしの間で、人の世はこれの応酬です。ヤコブ 4:1-9を読んでください。

②人の怒りは空しい

怒りは「自分は悪くない」と思う者が抱き、それを示すことこそ正義だと思いがちです。しかし、私たちは何も悪くないのでしょうか。相手の非を責めたから、自分が正しくなれるわけではありません。人の怒りは神の義を実現しないのです(ヤコブ 1:19-20)。

③堅く立って事を行う(32)

私たちはさばく者ではなく、さばかれる者に過ぎません。神はその行いにしたがって、さばかれる方ですが、あわれみ豊かな方です。軽んじてはなりません(ヤコブ 2:12-13)。周囲に流されたり、惑わされず、この御方の前に堅く立って歩ませていただきます。

<おわりに> 苦難も賢明な者たちが鍊られ、清められ、白くされるため(35)の道具です。「しかし、その時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる」(12:2)と聖書は確約しています。騒ぎ立つ時代の中にあっても、揺るがされることなく神を仰ぎ、歩みましょう。(H.M.)